

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03503

研究課題名(和文) 狩猟・漁撈の諸要素に着目した野生動物法の各論構築

研究課題名(英文) Pentalogy on Fish and Game: Defining the Particulars of Wildlife Law

研究代表者

高橋 満彦 (Takahashi, Mitsuhiro)

富山大学・学術研究部教育学系・教授

研究者番号：10401796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者高橋が提案する「野生動物法」の各論構築として、狩猟を中心に、対象動物(狩猟動物)、場所(猟場)、時季(猟期)、道具(猟具)、人(猟人)に関する研究成果を上げることであったが、多くの論考を発表し、所期の目的を概ね達成できた。

鳥獣害の増加を受けて、野生動物と法に関連する議論は増えているが、保護か管理かという二項対立的な平板なものも多く、民俗学や環境史学の諸研究からは見劣りしたが、本研究を通じて、野生動物と社会との法関係を歴史的に把握するとともに、現代的問題点をも明らかにし、今後の持続可能な野生動物管理保全制度構築の貴重な指針となる研究成果を出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、狩猟を中心に、対象動物(狩猟動物)、場所(猟場)、時季(猟期)、道具(猟具)、人(猟人)に関する研究成果を上げることであったが、多くの論考を発表し、研究代表者高橋が提案する「野生動物法」の各論構築としての目的を概ね達成できた。

鳥獣害の増加を受けて、野生動物と法に関連する議論は増えているが、保護か管理かという二項対立的な平板なものも多く、民俗学や環境史学の諸研究からは見劣りしたが、本研究を通じて、野生動物と社会との法関係を歴史的に把握するとともに、現代的問題点をも明らかにし、今後の持続可能な野生動物管理保全制度の構築のために、実務と学術の両面に貴重な指針となる研究成果を出せた。

研究成果の概要(英文)：This unique study “Pentalogy on Fish and Game: Defining the Particulars of wildlife Law” quests to analyze legal aspects of the elements in hunting, fishing, and gathering: game animal, hunting ground, season, engine, hunter. The background of the research project is attributed to the increase of wildlife and the demand of increased wildlife management in Japan. Hunting activities are encouraged to control the wildlife and vermin; however, most existing research is technical and/or naive, without critical analyses in socio-legal contexts. Our research published more than dozens of articles in the aforementioned five fields, with some are without precedence--such as research on hunting seasons. This research in the subject of wildlife with strong interwinding between history, anthropology, and law is providing valuable insight to Japan's future wildlife management.

研究分野：環境法、野生動物法

キーワード：狩猟 野生動物法 鳥獣被害対策 ハンター 法社会学 資源管理 野生動物管理 漁撈

1. 研究開始当初の背景

鳥獣害の増加に伴う野生鳥獣管理の強化、鳥獣管理の担い手確保等の要請から、狩猟への関心が強まり、野生動物と法に関連する議論は増えているが、既存文献等の大勢は、実務的記述に始終するものや、保護が管理かという二項対立的な平板なものに止まっており、民俗学や環境史学の諸研究からは見劣りしていると思えた。そこで、本研究を通じて、野生動物と社会との法関係を歴史的に把握するとともに、現代的問題点をも明らかにし、今後の持続可能な野生動物管理保全制度の構築のために貴重な指針となる研究成果を出す必要性を感じた。

2. 研究の目的

研究代表者は野生動物を巡る法分野としての「野生動物法」研究を提唱しているが、飼育動物などを扱う他の動物法分野と異なる大きな点は、捕獲を伴う行為に対応している部分である。本研究では、狩猟、駆除、漁撈などの捕獲行為に対応した野生動物法の特徴を抽出・分析し、野生動物法の各論を構築する。すなわち五部作として、「対象動物」、「猟〔漁〕場」、「猟〔漁〕期」、「猟〔漁〕具」、「猟〔漁〕人」の五つに関する研究成果を世に問う。もって、野生動物と社会との法関係を歴史的に把握するとともに、現代的問題点をも明らかにし、今後の持続可能な野生動物管理保全制度の構築のために貴重な指針となる研究成果を出すことを目的とする。

3. 研究の方法

鳥獣保護管理及び狩猟並びに密接に関連する分野である漁撈等に関する文献研究、実際の捕獲や実猟への参与観察や、担い手となる狩猟者や行政及び地域の関係者への聴き取り調査などを行い、研究分担者、研究協力者らとの討議を経て、「対象動物」、「猟〔漁〕場」(場所)、「猟〔漁〕期」(時季)、「猟〔漁〕具」(道具)、「猟〔漁〕人」(人・担い手)の五つに関する学会発表、論文等を執筆し、世に問うこととする。

具体的には、次のような研究が中心となる。

「対象動物」について、動物に関する研究は一定数あり、増加もしているが、制度的な研究はまだ少ないために、制度的考察を深める。

「猟場」すなわち狩猟の場については、かねてより一部の関係者間でその必要性は認識されているものの、所有権法との関連などの複雑な要素があり、戦後の既往研究はないに等しい。しかし、近年の所有者不明土地問題などもあり、早急に理論的考察を進める。

「猟期」についての既往研究はほぼないため、新たな研究分野を開くこととする。

「猟具」については、実務的な検討は盛んだが、法理論的に貢献できる事柄を検討する。

「猟人」について、担い手(猟人)に関する実務的検討は急務だが、理論的な研究は少ないため、理論構築を行い、現在錯綜する鳥類管理制度の再編成も見据えることとする。

なお、これらに分類しきれない関連分野に関する研究も、可能な限り実行し、厚みのある総合的な研究を目指す。

4. 研究成果

研究期間を通じ、上記5分野に関連する論考等を多数発表することができた。論文は25編、学会発表等は30数件に上った。以下、五つの研究分野に分けて、主な研究成果を概観する。

狩猟や捕獲管理の対象となる動物に関しては、その効果的な捕獲や管理についての研究は増えているが、動物自体をどのように捉えるかは複雑な問題であり、高橋(2022)「小中学校教科書における鳥獣保護管理の取扱い」は、学校教育を通じてどのように子どもたちが野生動物について学んでいるのかを分析し、保護に比べて管理の必要性が圧倒的に少ないことを指摘した。また、単純に保護と管理に峻別するべきではないというのが、本研究課題の研究者の意見だが、仮に管理捕獲が必要となっても、その動物は敬意を払い有効に利用がされるべきであり、田口(2022)「ジビエと獣害：マタギとアイヌの視点から」は、マタギやアイヌの伝統的な人と動物の関係から、示唆される点を説いている。

猟場に代表される土地の問題については、高橋(2024)「猟区の本質と可能性 - 古賀・赤石による猟区の通史と実態に関する論考に接して」において、猟区制度の本質的な議論を展開した。また、法社会学大会(2024年北大)で、研究代表者高橋は「日本の山林における狩猟と土地所有権」と題して講演し、当該内容は法社会学会誌の次号に掲載される予定であるが、西欧における封建期から市民革命を経ての動き、我が国においては明治初期の狩猟法制定時の論争と、後述の狩猟者アンケートから見える実情などを交えて議論を展開している。また、保護区・禁猟区に関する議論として、研究分担者奥山正樹による「鳥獣保護区の指定区分および指定実績の変遷」(2023)など、複数の論考がある。保護区は保全生態学では重要なツールとして議論されているものの、我が国における鳥獣保護区をはじめとする保護区の制度的研究は少なく貴重である。

猟期に関しては、研究と呼べるようなものではなく、本研究課題の成果である高橋(2019)「猟期考 野生動物法の時間的各論として」は、我が国のみならず、英独米における猟区の歴史的変遷を示したうえで、鳥獣管理上重要なツールである猟期に関して貴重な研究成果である。

猟具に関しては、研究分担者田口洋美を中心に、実務的考察のみならず、歴史的な分析（田口 2020「マタギの狩猟具と狩猟システム」(講演)）を行い、イヌの放飼的活用、弓矢猟の検討なども含めて、伝統的生態学知識または民俗知（TEK）に基づく管理捕獲方法を提唱している（田口（2021）人文社会系のクマ研究：経験と知恵の民俗知）、高橋（2019）「資源管理法制から見る知識の重層性」など）。

担い手でもある人の問題は、野生動物管理制度の構築とも密接に関連する重要な課題であり、上田・高橋ほか（2018）による福島原発事故による放射能汚染が狩猟及び野生動物管理に与えている影響「特にイノシシの管理に留意して」は、上田・高橋らが全国の狩猟者2万数千人を対象に行ったアンケート調査を分析した論考で、アンケートで得られた情報のうち、特にハンターの出猟動機、鳥獣管理への協力を含めた捕獲行動を後押しする要因と、捕獲行動を躊躇させる要因の分析などを、福島原発事故による放射能汚染との関連で考察した貴重な論考である。また、高橋（2018）「持続的な野生動物法の主体に関する批判的考察：市民・専門家と狩猟者の三者に注目して」は、野生動物管理を巡る狩猟者と市民及び専門家の接点とわかりあえない相違点を浮き彫りにした。

これら5分野に止まらず、高橋（2023）「鳥獣の写真撮影・観察に対する規制について」のように関連分野でユニークな研究成果を上げた。また、イヌの狩猟漁撈採集に関する権利に関する論考（Takahashi, Taguchi, Monbetu）や、河川におけるサケ漁業権（高橋ほか）等、査読等の発表準備中の論考も複数ある。

上記のような研究成果の集積は、狩猟採集活動を五つの要素に分けて法的考察を加えるという点で大きにユニークであるばかりか、ともすれば、目先の政策課題（鳥獣害対策と捕獲強化）に偏重し、実務的にとどまりがちな議論に対して、歴史や民俗に根差した法理論を掘り下げた、貴重な成果群を世に提供することができたと考えている。これらの成果から、各種の政策的にも研究的にも一層の検討が必要となる事項がいくつも見えてきた。例えば、増加する所有者不明土地と狩猟の場を巡る問題や、一人の狩猟者が、登録狩猟を行うハンターと認定鳥獣捕獲等事業者という二つの役割を演じるにあたっての関係論など、実務的にも理論的にも難しいが、放置できない問題である。今後、それらの現代的課題に関する研究を継続したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 高橋 満彦	4. 巻 28
2. 論文標題 鳥獣の写真撮影・観察に対する規制について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保全生態学研究	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18960/hozen.2037	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋 満彦	4. 巻 44
2. 論文標題 猟区の本質と可能性 - 古賀・赤石による猟区の通史と実態に関する論考に接して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 入会林野研究	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋 満彦、早矢仕 有子、菊地 直樹	4. 巻 28
2. 論文標題 絶滅危惧種保全とエコツーリズム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保全生態学研究	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18960/hozen.2232	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奥山正樹	4. 巻 50
2. 論文標題 鹿児島県における国指定鳥獣保護区	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Nature of Kagoshima	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥山正樹	4. 巻 -
2. 論文標題 鳥獣保護区の指定区分別の現状と傾向	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 野生生物と社会 (受理済み)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋 満彦, 大宅 裕紀, 土井 徹	4. 巻 31(4)
2. 論文標題 小中学校教科書における鳥獣保護管理の取扱い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 環境教育	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5647/jsoee.31.4_48	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥山 正樹	4. 巻 11
2. 論文標題 鳥獣保護区の指定区分および指定実績の変遷	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 野生生物と社会	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20798/awhswhs.11.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金丸太一, 古賀達也, 神宮翔真, 加藤恵理, 高橋満彦	4. 巻 2(27)
2. 論文標題 初めて学ぶ鳥獣保護管理法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Wildlife forum	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 92(1)
2. 論文標題 ジビエと獣害：マタギとアイヌの視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 47-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上一馬	4. 巻 5
2. 論文標題 盛岡藩の狩猟規制 生類憐み令前の鳥獣の捕獲と独占	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北の歴史から	6. 最初と最後の頁 56-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋満彦	4. 巻 54(3)
2. 論文標題 英国法における紀年法と暦について -リーガル・サイティションから読み解く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較法学	6. 最初と最後の頁 111 - 132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 21(3)
2. 論文標題 人文社会系のクマ研究：経験と知恵の民俗知	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BEARS JAPAN	6. 最初と最後の頁 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 9
2. 論文標題 旅マタギを検証する：技術と歴史史料でたどる出稼ぎ狩猟の実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 津南学	6. 最初と最後の頁 222-255
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋満彦	4. 巻 9
2. 論文標題 資源管理法制から見る知識の重層性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 知識共創	6. 最初と最後の頁 IV2, 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋満彦	4. 巻 53(2)
2. 論文標題 獵期考 野生動物法の時間的各論として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較法学	6. 最初と最後の頁 75-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋満彦	4. 巻 42
2. 論文標題 地域に根差した実践的環境教育の意義：羅臼高校における野生動物を題材にした「知床概論」を題材に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 知床博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 77 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早矢仕 有子・菊地 直樹・高橋 満彦・中川 元	4. 巻 42
2. 論文標題 北海道羅臼高等学校におけるシマフクロウ特別授業	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 知床博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 113
2. 論文標題 舟で獺場に通う日々	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Arctic Circle	6. 最初と最後の頁 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 記念号
2. 論文標題 「狩猟高度化事業」の提言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大日本猟友会法人設立80周年記念誌：そして未来へ	6. 最初と最後の頁 21-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 3
2. 論文標題 シシ荒れから見た森林	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 森づくりフォーラム (特集号)	6. 最初と最後の頁 4-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋満彦	4. 巻 49
2. 論文標題 持続的な野生動物法の主体に関する批判的考察：市民・専門家と狩猟者の三者に注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法の科学	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田 剛平 , 高橋 満彦 , 佐々木 智恵 , 伊原 禎雄 , 小寺 祐二 , 大槻 晃太	4. 巻 6(1)
2. 論文標題 福島原発事故による放射能汚染が狩猟及び野生動物管理に与えている影響 特にイノシシの管理に留意して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 野生生物と社会	6. 最初と最後の頁 1 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20798/awhswhs.6.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 44
2. 論文標題 移住者がマタギを継ぐとき	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日獺会誌	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 124
2. 論文標題 鳥獣害で見直される野生動物との共存	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SAFE	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口洋美	4. 巻 87(9)
2. 論文標題 近現代における丸木舟製作とその利活用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 864-869
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計35件 (うち招待講演 19件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 日本の山林における狩猟と土地所有権
3. 学会等名 2024年度日本法社会学会学術大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 草原性希少種と種の保存法
3. 学会等名 日本鳥学会2023年大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 野鳥撮影や観察の法的規制を考える
3. 学会等名 日本鳥学会2023年大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 愛甲哲也・千葉利久・菊地直樹・早矢仕有子・高橋満彦・豊田光世
2. 発表標題 パートウォッチャーの専門志向化からみた行動・意識の相違
3. 学会等名 「野生物と社会」学会第28回大会・つくば大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 奥三面の人びとの生活行動に習う
3. 学会等名 白い森芸術祭（山形県小国町教育委員会）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 生物分類と法を巡る諸問題について：DNA時代の正名論
3. 学会等名 日本鳥学会2022年大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 秋山郷に定着した秋田マタギと近世イノベーション
3. 学会等名 大地の芸術祭2022シンポジウム, (越後妻有里山協働機構, 津南町) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 山林文化：マタギ集落と森林
3. 学会等名 臺灣興日本「文化興環境共生：原住民文化興環境知識」（國立臺灣史前文化博物館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 森を使い分ける：羽越マタギの思考と形
3. 学会等名 山形県立博物館博物館講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山正樹
2. 発表標題 集団渡来地における鳥獣保護区の現状と傾向
3. 学会等名 日本鳥学会2022年度大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山正樹
2. 発表標題 鳥獣保護区の指定と鳥獣被害に関係はあるか？
3. 学会等名 「野生物と社会」学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 狩猟と土地所有権の相克：鳥獣害対策時代における諸課題
3. 学会等名 龍谷大学社会科学研究所「地域特性」G 2022年度第4回共同研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 奥山正樹
2. 発表標題 近年の鳥獣保護区の指定状況
3. 学会等名 第26回野生生物と社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 三面集落モデル：市場化プロセスの中山間地生活構造変動期を中心に
3. 学会等名 第133回日本森林学会公開シンポジウム：東北の森から（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 アイヌとマタギ：その伝統と技術
3. 学会等名 国立台湾史前文化博物館：先住民文化講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 アイヌとマタギ：獵・漁文化の今日的再構築へ向けて
3. 学会等名 21世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト勉強会（平取アイヌ協会,平取町主催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mitsuhiko A. Takahashi
2. 発表標題 High and Low Legal Tradition in Japanese Natural Resources Management: Who's the Law here?
3. 学会等名 ALSA 2019 4th Annual Conference（アジア「法と社会」学会）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiromi Amemiya
2. 発表標題 How do we use the Legal Lessons from Environmental Pollution? --from perspective of Itai-itai disease-
3. 学会等名 ALSA 2019 4th Annual Conference（アジア「法と社会」学会）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋満彦・大宅裕紀・土井徹
2. 発表標題 小中学校の教科書における野生動物保護管理の取り扱い
3. 学会等名 「野生生物と社会」学会2019年大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 共生の世界を目指した人々：『八戸藩庁日記』と秋田マタギの実相を求めて
3. 学会等名 八戸市博物館 秋期特別展併催講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 マタギの狩猟具と狩猟システム
3. 学会等名 浅間縄文ミュージアム・シンポジウム『Hunting：狩猟相開明のためのアプローチ』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 阿仁マタギの真価：近世市場経済システムへの適応戦略
3. 学会等名 日本遺産記念・マタギシンポジウム（北秋田市主催）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 犬の放し飼い特区構想
3. 学会等名 第30回ブナ林と狩人の会：マタギサミット in 北秋田
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 資源管理法制から見た知識の重層性
3. 学会等名 第9回知識共創フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 観察・撮影を含めた鳥獣の非消費的利用の得喪とその規制の是非
3. 学会等名 日本鳥学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 東シベリアと日本の狩猟文化
3. 学会等名 「東シベリアと日本の狩猟文化」,北海道立 北方民族博物館 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 なぜクマは里に下りるか：人とクマのこれまでとこれから
3. 学会等名 平成30年度福島 県ツキノワグマ被害防止研修会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口洋美・高橋満彦
2. 発表標題 移住者がマタギを継ぐとき
3. 学会等名 第29回ブナ林と狩人の会・マタギサミット
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 クマの生態・クマ食と獺の伝統文化
3. 学会等名 平成30年度福井県ツキノワグマ狩猟者育成業務事業研修会（福井県自然環境課）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 クマと人間 マタギ文化の今と未来
3. 学会等名 第6回大阿仁未来フォーラム マタギ 文化をどう継承していくか（北秋田市教育委員会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 社会の持続可能性と法主体の再構築：自然環境特に野生動物と法主体
3. 学会等名 民主主義科学者協会法律部会2017年学術大会全体シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋満彦
2. 発表標題 野生動物保全の法体系と法整備の課題
3. 学会等名 日本動物学会第88回富山大会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 極東ロシアにおける小型丸木舟の製作とその利活用
3. 学会等名 第42回日本民具学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 旅マタギを検証する-技術と歴史史料でたどる出稼ぎ狩猟の実態
3. 学会等名 東北歴史博物館特別展「熊と狼」講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口洋美
2. 発表標題 「環北太平洋地域の伝統と文化 アムール下流域・沿海地方」
3. 学会等名 第32回北方民族文化シンポジウム 網走（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 飯考行（編著）、高橋満彦ほか共著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 312
3. 書名 ディスカッション法と社会	

1. 著者名 新谷尚紀編著（分担 田口洋美）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 角川文庫	5. 総ページ数 504
3. 書名 民俗学がわかる事典	

1. 著者名 榎陽介, 菊池健策, 中村ひろ子, 宮本八重子, 共著者：池田哲夫, 印南敏秀, 榎美香, 田口洋美ほか63名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 658
3. 書名 民具学事典	

1. 著者名 手塚薫, 出利葉浩司, 賀雪湖, 秋野茂樹, 齋藤玲子, 田口洋美ほか7名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 風土デザイン研究所	5. 総ページ数 128
3. 書名 アイヌ文化と森：人々と森の関わり	

1. 著者名 藤田栄一（制作）、村上一馬（再編集、解説）、高橋満彦（再編集、解説）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 非売品	5. 総ページ数 -
3. 書名 伝統狩猟映像資料「熊とたたかう」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

普及活動として、研究期間中の各年の6月に、ブナ林と狩人の会主宰の「マタギサミット」に協力し、参加した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田口 洋美 (Taguchi Hiromi) (70405950)	東北芸術工科大学・芸術学部・教授 (31501)	2023年より名誉教授。富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター研究協力員
研究分担者	奥山 正樹 (Okuyama Masaki) (60898443)	鹿児島大学・産学・地域共創センター・特任教授 (17701)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	村上 一馬 (Murakami Kazuma)	宮城県立利府高等学校・教諭	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	上田 剛平 (Ueda Gouhei)	株式会社野生鳥獣対策連携センター・取締役	
研究協力者	チャールトン ガイ (Guy Charlton)	ニューイングランド大学・Faculty of Law・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 "Natural Resource Policy, Culture and Law" UCLA Engaged Scholarship in the Asia Pacific Webinar	開催年 2022年～2022年
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ニュージーランド	オークランド工科大学先住民族法と権利研究センター		
オーストラリア	ニューイングランド大学先住民族の権利と法センター		
米国	アイオワ大学人類学科		